

石田 光男 著

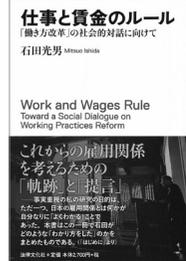
『仕事と賃金のルール』
——「働き方改革」の社会的対話に向けて

熊沢 誠
(甲南大学名誉教授)

賃金が労働の報酬である限り、一国の賃金決定ルールの把握は、仕事のさせ方・させられ方の考察なしには完結しえない。いま思えば労使関係研究には不可欠のこの視点を最初に提起したところに石田光男の慧眼があった。この問題意識にもとづいて石田は、長年の調査研究を通じて、日本の職能給や「部門別業績管理」を、また英米の賃金と仕事のルールを、国際比較の視野をもつてくわしく明らかにする作業を重ねてきた。本書はその分厚い蓄積をみごとに小著にまとめあげた研究者必読の作品である。

調査研究のあゆみの記述という趣もある。石田が単独で、あるいは他の研究者とともに訪れて工場見学、資料収集、忌憚ないヒアリングを行った国内外の企業の広汎さには驚くほかはない。日本の自動車産業や電機企業、イギリスのBSC、ジャガー、その他の製造業、アメリカのGMランシング工場などにそれは及ぶ。本書はそれらの踏査の成果——日、英、米の仕事と賃金の両面にわたる、概論に留まらない具体像、経営者の理念、確信と悟りの率直な語りなどを密度高く記している。紙数の都合上、その豊富な内容をくわしく伝えることはできない。ここでは161頁の表にもとづいて、くっきりと示された欧米モデルと日本モデルの雇用関係の対照的な様相を紹介するに留めたい。

仕事のルール 欧米：PDCA (Plan・Do・Check・Action) の運用困難、静態的課業決定／日本：PDCAの階層浸透的な運用、動態的課業決定
労働アーキテクチャー 欧米：「計画と実行」の



●法律文化社
2023年10月刊
四六判・200頁
定価2970円(本体2700円)

●いしだ・みつお 同志社大学名誉教授、国際産業関係研究所所長。

分離とキャリアの階層的分離、専門職ジョブの職域区分／日本：「計画と実行」の結合とキャリアの階層的な連続性

賃金のルール 欧米：職業的資格を含む仕事基準／日本：「人」(能力・役割)基準

雇用関係 欧米：「取引の過剰」／日本：「取引なき取引」

私の理解では、要するに、「ジョブ型」の英米では、労働者の階層的存在ゆえに、賃金ルールも作業管理も、企業は従業員を包括・統合して遂行することができない。「メンバーシップ型」の日本ではしかし、労働者の階層性は稀薄であり、企業は賃金決定もPDCAの運用も全従業員(全正社員?)を対象に一括管理することができる。だから欧米では職場レベルで組合交渉が「過剰」なのに対して、日本では多段階におかれた経営主導の協議でトラブルが吸収されているのだ。この労使関係論の泰斗による国際比較はきわめて正確であり、私はみずからの乏しい研究からしても、ほぼ全面的に賛同することができる。

経営の効率性から評価すれば、欧米型より日本型が望ましいことはいうまでもない。しかし日本の企業社会では、労働者は「平等処遇」の代償として、日々の仕事のニーズをめぐる発言権に乏しく、不自由の感覚や拘束感に苛まれているかにみえる。対比して、「下に分断」されている代わりに個人査定もまぬかれる欧米のノンエリートは、企業の要請よりは自分の生活を大切にする、いわば「被差別者の自

由」を享受しているのではないか。こうした価値判断について石田は明示的に語っていないが、ときに欧米の経営管理を辛辣に描く。日本モデルを「目的合理性」の点から高く評価するスタンスがうかがわれよう。

とはいえ、石田は私のような日本的経営批判の対極にあるわけではあるまい。「働き方改革の社会的対話」をめざす最終章で、日本にとっての必要性に

ついて石田はこう書く。「成功しすぎた私的秩序形成が、管理化された「取引なき取引」の雇用関係を生み、働く人々相互の同調圧力によって個々人のニーズの主張が自主規制されてきたことを虚心に考えりみること」(177頁)。

十分に了解できる。こうした複眼的な把握にも石田光男の著作の魅力はある。

西村 純子・池田 心豪 編著

『社会学で考えるライフ&キャリア』

筒井 淳也
(立命館大学産業社会学部教授)

これまでありそうでなかった「社会学の本」が登場した。

本書は、働くこと、就職活動、異動、転職、非典型雇用といった仕事に関する章と、未婚・結婚、親になること、介護をすること、といった家族に関する章が多くを占める。各章では、社会学で論じられてきた概念や理論、基本的なデータなどがバランスよく紹介され、上記のテーマについて基本的な事実を読者は知ることができる。その意味ではよくある社会学の本なのかもしれないが、この本は「若い人が人生を歩むうえで抱くであろう疑問」を出発点にすえている点の特徴である。各章の冒頭では、「やりたいことがみつからず進路に迷う人」「いつまでも家を出ていかない非正規雇用の姉がいる人」などが登場し、悩みを吐露する。

現在の日本の若者は、大学生であっても、かつてほど「卒業して、大企業に就職して、結婚して子どもを持ち……」といった「標準的なライフコース」を何の疑問もなく追求できるわけではない。非典型



●中央経済社
2023年9月刊
A5判・252頁
定価2860円(本体2600円)

●にしむら・じゅんこ
学基幹研究院教授。
●いけだ・しんごう
修機構主任研究員。
●お茶の水女子大
労働政策研究・研

雇用の増加や結婚難といった障壁を肌で感じているし、他方で「他の生き方」としての選択肢の広がりも感じているはずだ。

こういった、立ちばだかる困難と広がる選択肢の両方を感じているであろう現代の若い人たちにとって、本書は人生を考えるうえでの最良の出発点となりうると感じた。各章の内容は、古典や基礎理論に裏打ちされながらも、時代や地域の異質性に対応した柔軟な知を提供している点に特徴がある。「標準的な生き方」を押し付けることはないが、他方で非標準的な生き方をすることの難しさについても、データに基づいてフォローされている。読み手となる若い人に、決して無責任に「自由な生き方」を勧めているわけではない。

というわけで、本書は高校生や大学生にぜひ読んでほしい一冊である。もちろん大学の社会学入門用のテキストあるいは参考書としても非常に優れている。内容として平易すぎるということもない。内部

労働市場、教育の地位達成理論、近代家族など、大学の授業水準に相応の抽象度を持った概念も頻出する。グラノベッターやギデンズ、小熊英二といった、おなじみの——学生に知っておいてもらいたい——社会学者も登場する。ブックガイドからさらなる学習に展開することもできるし、各章の冒頭の「若い人が人生を歩むうえで抱くであろう疑問」について、章の内容を踏まえたうえでディスカッションすることもできる。そして何しろ、実際に若い人が持ちうる疑問や、将来の自分の生き方に引き付けたかたちで社会学を学べるのが大きい。

繰り返しになるが、本書は社会学を学ぶ学生のみならず、キャリア教育の一環として広く読まれてほしい本である。現在では大学でも「キャリア教育」を重視することが多くなったが、若干迷走しているように感じられることもある。筆者自身、雇用が不安定化するなかで、職業生活をするうえで知っておいてもよいであろう制度、たとえば労働時間規制、

職業訓練制度、派遣や有期雇用に関する基本的法律など、若い人はほとんど知らない。それは、「標準的で安定した生き方」をしている限り、そんな知識が必要になることがあまりないからだ。同じように、なぜ異動や転勤があるのか、正規・非正規の賃金差があるのかといった疑問についても、ついで考えないままに「社会」に放り出されてしまう。

要するに、働くことや家族を持つことについての基本的な知識、基本的な考える材料も与えられないままに、若い人がいきなり世に出されてしまうのが現状なのだ。もちろん、親や先輩などの身近な人たちが貴重な助言をしてくれるかもしれないが、それらは得てしてバランスが良くない偏ったアドバイスになってしまう。メディアが提供する情報も断片化され、整理された知識に組み上がることはない。

キャリア教育には、体系化された社会学の知識の蓄積が有用だということを、本書はあらためて教えてくれたように思う。